九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

平曲の詞章と旋律

奥村，三雄

https://doi.org/10.15017/2332698

出版情報：文學研究. 76, pp.15-37, 1979-03-31. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

平曲の詞章と旋律

奥村三雄

一　はじめに―語り物のことばと旋律

平家物語や謡曲・浄瑠璃の様な語り物の研究は、当然の事ながら文字だけが頼りの文学作品とは異った面を有する。もともと平曲の如き語り物は、音楽性と文芸性の共存という点に特徴がある。歴史的に見ると、神楽歌や催馬楽などのいわゆる古代歌謡類が一般に音楽性中心であり、その内容面が軽視される傾向にあった為、それを補おうとして発達した或種の叙事詩的ジャンルが語り物だったとも言える。しかし、それは所詮中途半端な性格を脱し得ず、やがて劇と純音楽とに分離する事となった訳である。

良かれ悪しかれ、文芸性と音楽性とが渾然一体をなしている語り物であってみれば、そこでは当然、その詞章と音楽性とが密接に絡み合っている事となる。

さし当り平曲についてみても、果して次の如く、その詞章と音楽的旋律との間に極めて密接な相関性が認められるのである。

(イ)〔詞章→旋律〕の関係　㊀平曲の曲節（大旋律型）は、その詞章内容と関係が深い　㊁具体的旋律は概ね詞章アクセントに基く

㈤〔旋律↓詞章（ことば）〕の関係　㈥テキストによる本文詞章の変化は音楽的旋律との関係が深い　㈠語音形も旋律に影響される場合が多い

所で「語り物の研究に音楽面の考慮が重要だ」という事は、必ずしも事新しい提唱ではない。例えば渥美かをる氏の如く、平家物語研究に関し、しばしばこの面からのアプローチを試みられた方がある訳だが、しかし実際問題として、この分野は尚いろんな意味で今後にまつ所が大きい。

本稿は、右記の中でも特に未開拓な点の多い㈥の面を中心に考えようとする。

二　語り物としての平曲と詞章変化

語り物文芸としての平家物語の詞章変化と言えば、この作品は他の文学作品に比し、本（テキスト）による文章異同が遙かに著しいが、その事自体、聴覚的文芸という平家物語の性格を如実に反映している。盲僧による口伝え相承は音楽性の支えもあって、普通の口語より遙かに厳格な伝統性をもっていた様だが、しかし、文献から文献へという写本関係の保守性には到底及ばない。

下記第七章は、一般に本文異同の少い一方流本だけを比較したものだが、これに八坂流本や屋代本の如き古本を比べ合わせると、収拾がつかない程複雑になる。特に延慶本や四部合戦状本などいわゆる増補本類は、むしろ別の作品とも見なしたい位である。

音楽的旋律と言えば、覚一本以下一方流本の詞章異同においては、さし当り、左記戯曲調から叙事詩的文語調への変化傾向が注目されるが、これもやはり《平曲旋律の定着という事と相まって、その語り物的旋律の音調口調を尊んだ》為の現象と言えよう。一般的には、新しいテキストになる程詞章の増補傾向が著しい様だが、例えば下記第七章の諸例においても、次の如く、語句の増補により句調をひきしめた現象がいろいろ認められるのである。

(A) ト書きの増補―那須の例(37)(67)(85)

(B) 係助詞の増補　コソ―那須の例(4)、ゾ―我身の例(5)・那須の例(36)(49)、ヤ―我身の例(21)

(C) 文語調助詞　ダニ―禿の例(24)(39)(42)、ヲバ―鱸の例(44)・禿の例(14)・那須の例(25)(116)、トテ―禿の例(12)、ニテ―那須の例(15)、ツツ―我身の例(10)

(D) 文語調助動詞　タル（指定）―禿の例(31)、ムズル―那須の例(114)

覚一本の戯曲性については既に説かれた所であるが、何れにしても語り物的韻律としては当然、この様な戯曲体よりも新しい一方流本の如き文語調の方が適しているはずなのである。

三　詞章異同率と曲節

ここで特に注目すべきは、平家物語諸本の本文異同が曲節の種類と深い関係を有する事である。とりあえず平家物語十二巻全句の中から「鱸・禿・我身栄花・二代后・額打論・清水炎上（以上、十二巻本の巻一所属）・那須与一・弓流（同巻十一所属）」の八句をぬき出し、覚一本以下一方流諸本の詞章異同を調べてみるに、左記一覧表の如く、≪白声や口説など音楽性の薄い曲節は、一般に詞章異同が著しく、歌の類や初重・中音・三重など音楽性の著しい曲節は異同が少い≫という傾向性を認め得る。

歌の類では詞章異同が全く無いし、その他でも、禿・額打論・清水炎上の初重類や、我身栄花・二代后・額打論の三重類では異同が認められない。更に細かく見てゆくと、例えば我身栄花の場合、三重及び下リは二箇所ずつ、初重中音は一箇所あるが、そこでは詞章異同がない。また初重の例五箇所のうちの三箇所（尾崎本正節4712・4713・4743）、中ユリ四箇所のうちの二箇所（同4703・4743）、中音二箇所のうちの一箇所（同4702）等についても、それぞれ異同が認められないのである。その辺詳しくは次の一覧表の他下記第七章をも参照の事。また尾崎本平家正節の用例

の示し方等も、第七章最後の注記を参照されたい。

曲節別詞章異同率一覧表（異同数／総行数）

	白声類	口説	下ケ類	折声類	初重類	中音類	三重類	歌類
鱸	14／18	21／22.5	3／1.5	0／0	7／9	4／5.5	1／3	0／4.5
禿	10／10	34／26.5	1／2	3／7	0／2.5	0／0	0／0	0／0
我身栄花	6／9.5	9／21.5	1／4	0／0	4／23.5	2／24	0／8	0／0
二代后	11／23.5	24／51	5／9	2／7.5	3／7	3／18	0／6	0／2.5
額打論	0／0	16／20.5	2／5	3／7.5	0／2	1／4.5	0／5	0／0
清炎上水	22／19	45／55	6／6.5	1／3	0／5.5	1／5	1／4	0／0
那与一須	38／23.5	44／29.5	10／5	0／0	0／0	2／3	8／11.5	0／0
弓流	32／28	79／47.5	10／9	6／8.5	0／0	0／0	0／0	0／0
合計	133／131.5	272／274	38／42	15／33.5	14／49.5	13／60	10／37.5	0／7
	1.01	0.99	0.90	0.45	0.28	0.22	0.27	0

表の説明

※右の表は平家正節を底本として、覚一本以下一方流諸本の詞章差を曲節別に精査し、その《異同箇所数と各曲節の行数（尾崎本平家正節の行数）との比率》を示したものである。

※これら八句のうち、鱸・禿・我身栄花・那須与一の四句については、下記第七章にその詳しい資料を示した故、それによってこの表の意味の詳細がうかがわれるはずである。

※ここではとりあえず、音楽性が著しい曲節の代表として歌の類や初重・中音・三重・折声、音楽性の薄い曲節として白声・口説及びその尾部の下ケ類の諸曲節をとり上げたが、下記第七章ではすべての曲節をとり扱った故、ついて参照されたい。

※曲節名については、或種の巨視的観点から整理を行った。例えば白声類には白声のほかハツミを含む。以下も同様である。下ケ類—下ケ・強リ下ケ・長下ケ・半下ケ、折声類—折声・峯声、初重類—初重・重初重、中音類—中音・初重中音・下リ・中ユリ、三重類—三重・走三重等。下記第三—一章をも参照の事。

三—一　主要曲節の音楽的性格

「白声や口説の類が音楽性に乏しく単純な曲節であり、歌の類や三重・中音・初重・折声の類が音楽性に富む」事など、各曲節の性格については、従来からもしばしば説かれた所であるが、以下、主要曲節の音楽的性格を略説しよう。

(イ) 白声—「節なくして文句にかなふ」と言われる語り句。口説の一部から独立した曲節である。その尾部にはハツミが付く。

(ロ) 口説—陽旋で単純な曲節。「一句の体」と言われるもので大ていの句は口説で始まる。その原楽型は〔e a h e d〕

(ハ) 下ケ—口説の尾部に付く短曲節で、単調な口説に変化を支えようとするもの。音楽性に富んだ陰旋で、初重等に似た面もある。その全体にわたり強力な固定的旋律が布置される。下ケの類として、武勇物に用いられる強リ下

ケをはじめ半下ケ・長下ケ・半強り下ケなどがある。下ケ・強り下ケ等の固定旋律については、下記第六章を参照の事。

(ニ) 拾―活潑で変化に富む陽旋。基音は漸降して陰旋で終る。上音・下音・呂など種々の小ブシを含む。原楽型は〔a d' e a g e H〕

(ホ) 強声―拾に似て勇壮だが、陰旋律で落ちついた響きがある。概ね口説の一部が独立したものと見られる。原楽型は〔a h c' d a e' c h e〕

(ヘ) 指声―流麗で近代的な旋律。陰陽両旋だが陽旋的色彩が強い。概ね他曲節のつなぎとなる。原楽型は〔a h f e d c H A E〕

(ト) 折声―音巾広く、一音ずつ切って装飾音をつける陰旋で悲哀調。原楽型は〔h' e h a fis e H〕。峯声も折声に似ている。

(チ) 初重―揺りを多用し変化に富んだ優美な陰旋律。いわゆる平曲的歌謡調で美文調の感懐文等に多い。一句は大てい初重か中音で終る。その原楽型は〔d e a f e h e H A〕。初重のあとにつく初重が重初重である。

(リ) 中音―初重に準ずるが、それより高音階。ただし三重よりは低い。原楽型は〔fis a h' f h a fis e H A〕。中ユリは中音の尾部につく小ブシである。初重中音は初重の後に現われる中音であり、三重の後に現われる下リも中音に準ずる。

(ヌ) 三重―初重や中音に準ずるが最も高音階で、「一句の花」と言われる。原楽型は〔e' a' e h a e H〕。走三重は拾物等に見られる短章の三重である。

(ル) 上歌―歌詠調で、中音等に似た陰旋律。基本楽型は〔h' e fis' a fis e d c H A〕。下歌もこれに準ずるが、音階が低い。上歌・下歌・曲歌いずれも和歌の部分に用いられる。

㊟ 右記諸曲節における原楽型はすべて井野川幸次氏ら名古屋三検校の語る平曲による。

※ ここでは五線譜式音階表示をとらず、次の如き略記法によった訳である。ドレ……ラシをｃｄ……ａｈの如く示す。またＡＨ…はオクターヴ低いラシ……を示し、ｆ'ｇ'……はオクターヴ高いファソ……を表わす。fisはファに♯（シャープ）の付いた音階を示す。この略記法は以下の記述においても同様である。

なお原楽型については、藤井制心氏『採譜本平曲』（昭和四一年）等も参照の事。

※ その他諸曲節の性格については、自偶の『西海余滴集』や熱田呻吟庵の『平家物語指南抄』の類をはじめ、藤井雪堂『平語偶談』・館山漸之進氏『平家音楽史』、『日本文学研究』（昭和二七年）及び『平家物語講座(2)』（昭和三二年創元社）所収金田一春彦・土井光知・藤井制心諸氏の論文、『日本音楽とその周辺』（吉川英史先生還暦記念論集）所収金田一氏論文、渥美かをる氏「平家正節解題」（昭和四九年大学堂書店）等々、説が多い。それぞれついて参照されたい。

四　大巾な詞章異同と曲節

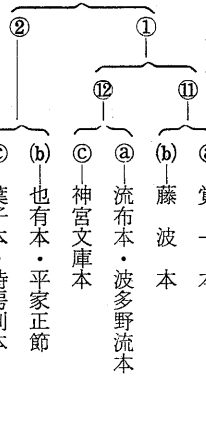
音楽性という事について更に興味深いのは、その詞章異同の内容である。音楽性の著しい曲節は詞章差が少いのみでなく、内容的にも概ね些細な違いに留まる。

下記第七章を見ても、鱸の例(56)をはじめ、(3)(5)(16)・禿の例(18)(20)(23)・那須与一の例(28)(30)(56)(68)(69)など、大巾な詞章異同は、概ね白声や口説に限られるのである。

これに対し、三重や中音・初重・折声等の類にはそれ程著しい音節数の増減が認められない。例外としては、せいぜい鱸の下リ(53)や、那須与一の走三重(124)が挙げられる程度である。而してそれも、前記鱸の例(56)や(3)(16)等の著しい異同には到底及ばない。

鱸の例(56)について言えば、この熊野信仰説話の部分は、覚一本以降も詞章が大きく変化する点で知られており、尾崎本平家正節六行半ぐらいの詞章が全体として揺れる。一方流本だけでみても収拾がつかない程の複雑さである。

敢えて諸本の系譜関係を考えれば、概ね次の如き整理ができそうだが、しかし何れにしても、詞章の揺れの著しさは否定できない所であろう。



この分類表を説明すると次の如くである。先ず「昔周の武王……」を「さしも十戒を…」の前におくのが①類であり、その逆が②類である。また①類のうち「昔周の武王……」を清盛の言葉とするのが⑪類、先達の言葉とするのが⑫類である。更にそれぞれをⓐ類ⓑ類ⓒ類の三つに下位分類するが、これは、先達の言葉を「権現の御利生」とするのがⓐ類、「めでたき御事」とするのがⓑ類、その両者を含むのがⓒ類である。その他、流布本・波多野流本・也有本・平家正節などの新しい本では、「いかさまにも」という様な語の追加が認められる。

なお、この部分の詞章異同が著しい事については、《かかる熊野信仰説話が原本になかったらしい》という様な事情も考え合わされるが、しかしそれはそれとして、《これが音楽的旋律の薄い白声・口説ブシである》という事はやはり見逃せまい。三重や中音の類では、とてもこの様な大巾な変化が起りそうにないからである。原本になかったと思しい増補文の類は数多認められるが、それらの部分が、一方流諸本で著しい詞章差を示すとは限らない。

下記第七章鱸の例(3)や(16)の詞章異同は、右記(56)の場合ほど著しくないが、それでも(16)の例では、葉子本↓時房本↓前田流本と次第に詞章が増補されるし、また流布本では敬語が増補されて、波多野・前田両流本に継承された。(3)の場合も、藤波本や静嘉堂本でかなり詞章が変り、流布本・波多野流本は藤波本を承けつつ、更に詞章を動かしているのである。

尚ここでは、諸本の詞章比較を単純化する為、異同部分の詞章単位をできるだけ分析的に示したが、翻って考えれば、鱸の例(7)〜(12)や(27)〜(32)はすべて右記(56)の部分にかかわり合う。これらの部分まで一緒にして異同関係を考えると、それこそ収拾がつかなくなってしまう事、言をまつまい。

そういう意味で言えば、禿の(20)や(23)は大巾な詞章異同と言っても、つまりは詞章の順序が逆になったに過ぎない訳だが、しかし、前者の場合(17)〜(21)を、後者の場合(22)〜(28)を、それぞれ一括してとり扱えば、真に大巾な詞章異同という事になりそうである。

更には、禿の例(36)〜(39)や、那須与一の例(17)〜(21)、(30)〜(36)、(67)〜(72)なども、それぞれ一括してとり扱う事ができそうだが、もし然らば、それらも相当大巾な詞章異同と言えよう。

これらを一括してとり扱った場合は、さし当り正節本と覚一本との間にも、それぞれ次の如き差が認められる訳である。左記においてカッコに包んだ部分は、覚一本にあって正節本にない詞章を示し、傍線部分は、正節本にあって覚一本にない詞章を示す。

禿(36)〜(39)　(衣文のかき様)烏帽子のため様より始めて衣文のかき様指貫のりんに至るまで何事も皆六波羅様とだに

那須与一(17)〜(21)　それに少しも子細を存ぜん殿ばら(人)は(とうとう)これよりとうとう鎌倉へ下らる(帰らる)べし

同(30)〜(36)　(小ぶさの鞦かけ) 丸ぼやすったる金覆輪の鞍をおいて(ぞ)乗ったりけるが弓とり直し手綱かいくって(くり) 汀へ向いてぞ

同(67)〜(72)　と宣へば(与一畏って申しけるは) 仕つとも存じ候はず(射おほせ候はむ事不定に候ふ) あの扇射損ずる程ならば(じ候ひなば) 長き味方の御弓矢の疵にて

かくして、下記第七章所掲の例は、考え方により、そこで示した形以上に大巾な詞章異同と見るべき場合がいろいろある訳だが、その様な例もやはり、白声や口説の類に著しく、音楽性に富んだ諸曲節では稀である。

なお前記第三章の異同率一覧表では、音楽性の著しい曲節及び薄い曲節の代表として八曲節をとり上げた。その中間的性格とも言うべき拾の類や強声・指声等の諸曲節は一おう省略に従った訳だが、それらは詞章異同の面からみても、概ね中間的である。即ち、それらの諸曲節は下記第七章の如く、初重・中音・三重などより遙かに詞章異同数が多いが、白声や口説の場合の如き大巾な詞章異同は認められないのである。下記第七章を参照の事。

五　平曲の詞章変化と音楽性

以上、ここでは鱸・禿など八句を例として、一方流諸本における詞章異同と音楽性との相関性を考えた訳だが、平家物語全篇についてみても、事情はほぼ同様であり、そこにはやはり左記(イ)〜(ニ)の如き傾向性が認められるのである。

(イ)白声・口説など音楽性の薄い曲節は詞章異同が特に甚しい。　(ロ)三重・中音・初重など音楽性の著しい曲節は詞章異同が少い。　(ハ)特に歌の類は詞章異同が殆んどない。　(ニ)大巾な詞章変化は概ね白声・口説に認められる。　(ホ)拾・強声・指声などの類は、三重・中音・初重等に比べて遙かに詞章異同が甚しいが、白声や口説の場合の如き大巾

な異同は稀である。

これらに関する資料の詳細は省略するが、さし当り、次の如きは何れも右記㈡の例と言えようか。―都遷（正節本巻四上）の白声「中宮～聞えし」（尾236 4～237 2）、卒都婆流（同巻一上）の口説「或夜～二つ」（尾292～293）、徳大寺厳島詣（同巻三上）の口説「徳大寺の～おはしけるが」（尾163 4）、　物怪（同巻十上）の口説「鼠～申す」（尾745 4～746 1）など。

何れにしても、平家物語諸本における本文詞章の変化が、その音楽性と深くかかわり合う事は確かである。そこには当然《音楽的旋律に支えられた詞章の保守性》という様な事情が想定される訳だが、その辺を更にたち入って考えると、例えば左記(a)～(c)の様な角度から説明し得ようか。

(a)音楽性の強い曲節は師資相承の際における厳格さが想定される。　(b)音楽性・韻律性が記憶を助ける。　(c)何かの事情で詞章を動かそうとした場合、音楽的旋律が固定している部分は、その関係で余り大きく動かせないという様な事も考えられる。

右記(a)は、音楽性に富んだ難しい曲節の場合、習う弟子も伝える師匠も心構えが真剣だったと考える訳だが、また(c)に関連して、古今集や後撰集の詞章変化が、源氏物語や枕草子の場合ほど著しくない事など言をまつまい。

更に(b)について言えば、京都の俳優嵐寛寿郎氏は若い頃の茶屋通いに関し、「東京弁を覚える為の小唄修業」と言訳をしている。それだけが目的だったかどうかは疑問だが、唯、一おうでもその様な言訳が通用するのはやはり、《韻律に支えられた記憶》という事が前提になるのだろう。また文字も読めない五・六才位の子供が百人一首を暗記するというのも、やはり韻律の支えによると考えられる。なお古代人が当時の文字(音節)を整理した場合も、「天地(アメツチ)の詞」の様な形式から漸次、「田居(タキ)に出での歌」や「いろは歌」の如き形に発展した訳だが、そこにもやはり庶民の暗誦という面の考慮がうかがえそうである。

六　固定的旋律と詞章変化

かくして、「平曲における詞章変化は、一般に音楽性の薄い曲節に著しい」事を述べたが、ここで問題となるのは、下ケや強リ下ケの類であろう。それらは前述第三―一章の如く、単調な口説の尾部についてその旋律に変化を与えようとするもの。それぞれ初重や強声等にも似た面のある陰旋律である。口説類に比し遙かに音楽性が著しい訳だが、詞章変化の面では口説等に匹敵するものがある。

そこには或程度、《固定的旋律の関係による詞章変化》という様な事も考えられようか。即ち強力な固定的旋律は、前記第五章(c)の如く大巾な詞章変化を阻止する場合が多いが、また一面、固定的旋律の都合で詞章が動くという様な事も想定される。特に下ケや強リ下ケの類はその短い曲節の殆んど全体にわたり、次の如き固定的旋律が布置しており、それが或程度詞章を動かすという事も、充分考えられるのである。

左記は、平家正節の譜記及び名古屋三検校の平曲からして、それぞれ下ケ・強リ下ケの固定的旋律を帰納したもの。「シ・ウ」などが正節本のそれであり、「〔ede〕・〔Eaf〕」等が現行平曲のそれを示す。

平曲全体として、下ケや強リ下ケブシはそれぞれ数百例認められるが、平家正節では左記の様な譜記が固定的に現われ、殆んど例外がない。現行平曲の場合は、譜本当時以降―恐らくは平曲自体の急激に衰退した幕末頃以降―に大きな旋律変化を起したらしく、この固定的旋律についても或程度の例外が見られるが、しかし大勢は動かないはずである。

下ケ「シ（沈み、ede）・ウ（浮き、Eaf）・「（折り、fefisec）」＋「ウ（e）・分（片入り、ec e）・＼（抑へ、H）」＋「ろ（大廻し、HeHHefisAHA）」

強リ下ケ―「上（a）・カケ（ahe）」＋「中（c）＋〜（強り、CAH）」のくり返し＋「乂（小廻し強り、H

d）・ろ（dcddeEefAHA）」

㊟ 現行平曲の旋律表示法については、前記第三―一章の注記等を参照の事。

《下ケや強リ下ケ類の詞章異同が、歌や三重・中音などと異り、白声や口説の類の場合に匹敵する程である》事は、前記第三章の一覧表や第七章等を一見して明らかであるが、また一面、余り大巾な詞章異同が認められない点で、白声や口説の類と異質である。而してこの事実もまた、その詞章変化が、白声や口説の場合と異り、固定的旋律によるものである事を思わせる。

所で、いわゆる固定的旋律は、下ケや強リ下ケに限らず、初重・中音・折声など音楽性の著しい曲節ではしばしば認められる訳だが、それらの場合は、固定的旋律に促された詞章変化という様なものが、余り認められない。この違いについてはさし当り、《(イ)固定的旋律の強力さ　(ロ)旋律固定化の時期》という二つの面から説明できようか。

先ずその(イ)について言えば、下ケや強リ下ケは前述の如く、強力な固定的旋律が、殆んどその曲節全体にわたって認められるが、その他の曲節の固定的旋律は、大てい各節の終りの方でごく局部的に見られる程度である。尤もこの面の違いはやや相対的な問題であり、ここでは(イ)よりもむしろ(ロ)の面を重視したい。

即ち、《下ケや強リ下ケ類の旋律が、概ね葉子本の頃（十五世紀頃）に確立したのに対し、初重・中音や三重などの曲節は、覚一本の頃以前に定着してしまった為、覚一本の頃以降の詞章変化が少なかった》と考えたいのである。そう言えば、初重・中音等の部分は、平松家本あたりから覚一本頃までの詞章変化が著しい様である。ここでは詳述しないが、例えば巻一の東宮立や巻三の頼豪の各終りの部分等はその例と言えようか。

その他にも述べるべき事はなお多いが、それらすべて別の機会をまつ事とし、以下とりあえず、平曲の詞章異同と音楽性との相関性を具体的に示す為、前記第三章の一覧表所掲八句のうち「鱸・禿・我身栄花・那須与一」の四句につき、一方流諸本における本文異同の詳細を曲節別に示してみよう。表示法等の説明はすべて後にまわした。

七　曲節別詞章異同一覧

（Ⅰ）　鱸（流布本巻一、正節本巻一上）

㋑　白声　(1)失せ給ひしかば（253）（流時葉）―失せにき（覚）、(2)次ぐ（254）（時覚）―次ぎ（流葉）、(3)安芸守とて味方にて勲功ありしかば（254）（也豊教時葉覚）―安芸守とて味方にて先をかけたりしかは（藤）・清盛未だ安芸守とて味方にて勲功ありしか（静）・先をかけたりければ勧賞行はれき、もとは安芸守たりしか（波流）、(4)そもそも（271）（流時葉）―ナシ（覚）、(5)せられける事をいかにといふに（271）―せられける事は（流）・せられけるも（覚）・する事は（時葉）、(6)偏に（271）（流）―ナシ（時葉覚）、(7)その故は清盛公（272）（波葉）―その故は清盛（流時）・その故は古へ清盛公（覚）・清盛公その時は（他豊）、(8)伊勢国阿野津（272）（流時葉）―伊勢海（覚）、(9)参られけるが（272）→に（流時葉覚）、(10)舟へ（272）（流時葉）―舟に（覚）、(11)入りたりけるを（同）（時覚）→ければ（流）・ける（葉）、(12)いか様にも（273）（也豊教波流）―ナシ（時藤葉覚）

㋺　口説　(13)皆（242）（流時葉）―ナシ（覚）、(14)なる（242）（流葉覚）―なって（時）、(15)或時（242）（也豊教波流時）―その頃（葉覚）、(16)はるばると都へ上られたりけるを鳥羽院御前へ召してさて（242）（也豊教）―都へ上りたりけるに鳥羽院御前へ召して（時）・都へ上りたりけるに鳥羽院（葉覚）・上られたりけるに鳥羽院（波流）、(17)おはしたりけるに（244）（流時）―ナシ（葉覚）、(18)通はれ（244）（時葉覚）―夜な〳〵通はれ（流）、(19)或夜（244）（流）―或時（時葉覚）、(20)かの（244）（流）―この（時葉）・その（覚）、(21)とり忘れ（251）（流時葉）―忘れ（覚）、(22)帰られたりけるを（251）出でられたりければ（流時葉覚）、(23)また（261）（流）―次に（時葉覚）、(24)信頼義朝（261）（流時）―信頼卿（葉覚）、(25)時も（261）（流時葉）―時（覚）、(26)平らげたりしかば（261）（流時）―平らげ（葉覚）、(27)調味し（274）（時葉覚）―自ら調味し（流）、(28)我身くひ（27

4）（流時葉）―ナシ（覚）、(29)郎党（27 4）（流時葉）―侍（覚）、(30)にも（27 4）（流時葉）―に（覚）、(31)食はせらる（27 4）（流時葉）―食はせられけり（覚）、(32)下向の後（27 4）（時）―ナシ（流葉覚）

㋩ 下ケ (33)仰せければ忠盛（24 3）（流時葉）―お尋ねありければ（覚）、(34)畏って（24 3）（也豊教波流）―ナシ（時藤葉覚）

㋥ 拾 (35)上(アガ)って（26 2）―経上って（流時葉覚）、(36)至り（26 2）（覚）―至る（流時葉）、(37)至る（26 2）―至り（流）・上る（時葉覚）、(38)大将にはあらざれど（26 3）大将にはあらねども（流葉）・大将にあらねども（時覚）、(39)蒙り（26 3）（時）―蒙って（流葉覚）、(40)宮中に（26 3）（時）―宮中を（流葉覚）

㋭ 指声 (41)申され（24 3）（流時）―申し（葉覚）、(42)斜ならずに（24 4）（時）―院大きに（流）・ナシ（葉覚）、(43)有て（24 4）（流時葉）―有りけり（覚）、(44)歌を（24 4）―歌をば（流時葉）・歌は（覚）

㋬ 初重 (45)風情にて忠盛の（25 3）（流時）―風情にて忠盛も（葉）・風情に忠盛も（覚）、(46)多かりけり（27 4）（時）―ナシ（流葉覚）、(47)我身（27 4）（流時葉）―ナシ（覚）、(48)に至り（27 4）（流時）―まできわめさせ給ひ（葉）・まできはめ給へり（覚）、(49)官（28 1）（時）―官途（流葉覚）、(50)よりも（28 1）―よりは（流時葉覚）

㋣ 下リ (51)されば（26 4）（時葉覚）―ナシ（流）、(52)名付けられ（26 4）（流時葉）―名付け（覚）、(53)けがすまじき官なれども入道相国（26 4）（時）―けがすべき官ならねども入道相国（葉）・けがすべき官ならねどもこの入道相国は（流）・けがすべき官ならねども（覚）、(54)握り給ひし（27 1）（時葉）―握り給ふ（流）・握られし（覚）

㋠ 三重 (55)師範として（26 3）（流葉覚）―師範して（時）

㋡ 白声～口説 (56)白声これはめでたき御事かな、いか様にも権現の御利益と覚え候参るべしと、ハッミ申しければ、口説入道相国さしも十戒を保って精進潔斎の道なれども、昔周の武王の舟にこそ白魚は躍り入りたんなれとて（27 2～）（豊教）―これはめでたき御事かな参るべしと申しければ、入道相国さしも十戒を保って精進潔斎の道なれども、昔

周の武王の舟にこそ白魚は躍入りたなれとて（時）・これはめでたき御事なり急ぎ参るべしと申しければ、さしも十戒を保って精進潔斎の道なれども、昔周の武王の舟にこそ白魚は躍り入りたりけれとて（葉）・これは権現の御利生なり急ぎ参るべしと申しければ、清盛宣ひけるは昔周の武王の舟にこそ白魚は躍り入りたるなれこれ吉事なりとて、かり十戒を保ち精進潔斎の道なれども（覚）・昔周の武王の舟にこそ白魚は躍入ったるなれいか様にもこれさばは権現の御利生と覚え候参るべしと申しければ、さしも十戒を保って精進潔斎の道なれども（波流）

㋟ 口説～初重 (57)口説うち続き初重吉事のみ（274）うち続いて吉事のみ（時）・吉事のみうち続いて（流葉覚）

▽異同無し　強下ケ（261）、上歌（243）（251）

（Ⅱ）禿　（流布本巻一、正節本巻八上）

㋑ 白声 (1)また（5574）―その故は（流時葉覚）、(2)そろえて（5574）（也教葉覚）―すくって（豊波流）・すくへて（時）、(3)往反す（5581）（也豊教）―往反しけり（波流時葉覚）、(4)御上（5581）（也豊教）―御事（波流）・御事を（時葉）・事（覚）、(5)出ださざる程（5581）―出ださざらん程（豊）・出ださぬ程（波流時葉覚）・出ださぬ内（也）・出ださるる程（教）、(6)聞き出だすと早（5581）（也）―ナシ（豊教波流時葉覚）、(7)催し（5581）（也豊教）―廻し（波流時葉）・廻して（覚）、(8)その（5581）（也豊教時葉）―彼の（波流覚）、(9)からめ取て（5582）（時覚）―からめて（流葉）、(10)六波羅（5582）（時葉）―六波羅殿（流覚）

㋺ 口説 (11)清盛（5562）（也豊教時葉）―清盛公（波流覚）、(12)為にとて（5562）（流）―為に（時葉覚）、(13)忽ちに（5562）（也豊教時葉覚）―即ち（波流）、(14)法名をば（5562）（流）―法名は（時葉覚）、(15)付給へ（5563）（流時）―名のられけれ（葉覚）、(16)その故（5563）（流時葉）―そのしるし（覚）、(17)凡そ人の（5563）（也豊教）―凡人（ボン）の（時）・自ら人の（波流）・人の（葉覚）、(18)出家の後も栄耀は尚尽きずとぞ見えし（5563）（流時）―ナシ（葉覚）、(19)従ひつき奉る（5563）（流）―従ひつく（覚）・思ひつき奉る（時）・思ひつく（葉）、(20)従ひ

付き奉る事は降る雨の国土を湿すが如く、世の普く仰げる事も吹く風の草木を靡かすに同じ（556 3）（也豊教時）↓ⓐとⓑが逆（波流葉覚）、(21)普く（556 4）（波時葉覚）―普き（也豊教）・ナシ（流）、(22)一家（556 4）（也豊教時）―御一家（波流葉覚）、(23)花族も英雄も、六波羅殿の一家の公達とだに言ひてんしかば（556 4）（也豊教）↓ⓐとⓑが逆（波流時葉覚）、(24)だに言ひてんしかば（556 4）（時葉）―だに言へば（流）・言ひてんしかば（覚）、(25)誰（556 4）（流時）―ナシ（葉覚）、(26)肩を並べ面を向ふ（556 4）（流時葉）―面を向へ肩を並ぶる（覚）、(27)者（556 4）（流葉）―君（時）・人（覚）、(28)入道（557 1）（葉）―また入道（流時）・されば入道（覚）、(29)時忠卿の（557 1）（流覚）―時忠卿（時葉）、(30)者（557 1）（流時葉）―人（覚）、(31)人非人たる（557 1）（流時葉）↓なる（覚）、(32)されば（557 1）（也豊教流時葉）―かかりしかば（波覚）、(33)この（557 1）（也豊教波流）―その（時）・相かまへてその（葉覚）、(34)ゆかり（557 1）（也豊教時葉覚）―一門（波流）、(35)いかなる人も（557 1）（也豊教流時葉覚）―我も人も（波）、(36)烏帽子のため様（557 2）（流時葉）―衣文のかき様烏帽子のため様（覚）、(37)衣文のかき様指貫のりん（557 2）（也豊教）―衣文の指貫のりん（時）・衣文のかき様（波流葉）・ナシ（覚）、(38)何事も皆（557 2）（也豊教）―何事も（波流時葉）・ナシ（覚）、(39)六波羅様とだに（557 2）（流時葉）↓ナシ（覚）、(40)凡そ（558 2）（也豊教波時）―されば（流葉覚）、(41)あらはし（558 2）（流時葉）―あらはれ（覚）、(42)だに言ひてんしかば（558 2）（也豊教時葉）―だに言へば（波流）・言ひてしかば（覚）、(43)皆（558 3）（流時葉）―ナシ（覚）、(44)通し（558 3）（流葉）―通り（時覚）

㈥ 下ケ (45)言ひてんしかば（557 2）（也流時葉）↓けれ（覚）

㈢ 折声 (46)いかなる賢王賢主の御まつり事（557 2）（流時葉）―またいかなる賢王の御まつり事も（覚）、(47)御成敗をも世に余されたる（557 3）―御成敗にも世に余されたる（時葉）・御成敗にも世に余されたる程の（流）・御成敗も世に余されたる（覚）、(48)人の聞かぬ所に寄合て（557 3）（時葉）・かたはらに寄合て（流）・人のきかぬ所

にて（覚）

▽異同なし　ハツミ（5582）、半下ケ（5583）、初重（5583）

（Ⅲ）我身栄花（流布本巻一、正節本巻七上）

㋑　白声　(1)高倉院（4732）（時葉覚）―これは高倉院（流）、(2)北の政所（4732）（也波流時葉覚）―御台政所（豊）、(3)御時（4733）（流時）―時（葉覚）、(4)蒙り（4733）（也時葉覚）―蒙らせ給ひて（豊波流）、(5)人にてそ（4733）（流時）―人にて（葉覚）、(6)ましましける（4733）（流時）―ましましけり（葉覚）

㋺　口説　(7)八才の年（4721）（流時葉）―八才の時（覚）、(8)御約束（4722）（流時）―約束（葉覚）、(9)違へられて後には（4722）（時）→て（流葉）・ナシ（覚）、(10)恋ひつつ（4723）（流時）―恋ひ（葉覚）、(11)立て（4723）（流時）―立てて（葉覚）、(12)これは（4734）（流）―おはせしは（覚）・おはしけるは（時葉）、(13)参らつさせ（4734）参らせ（流時葉覚）、(14)偏に（4741）（流時）―ナシ（葉覚）、(15)花山院殿の（4741）（流時覚）→に（葉）

㋩　下ケ　(16)皆（4723）（時）―ナシ（流葉覚）

㋥　初重　(17)十六人（4703）（流時覚）―ナシ（葉）、(18)皇子（4731）（時葉覚）―二十二にて皇子（流）、(19)及ばれず（4732）（流）―及ばず（時葉覚）

㋭　重初重　(20)末代とは（4714）（流時覚）―末代と（葉）

㋬　中音　(21)申されければにや（4724）（流時葉）→ナシ（覚）

㋣　中ユリ　(22)嫡子（4702）（流葉覚）―嫡男（時）

▽変化無し　口説（4704）、下ケ（4704）（4741）、初重（4712）（4713）（4743）、中音（4702）、初重中音（4713）、下リ（4712）（4742）、中ユリ（4703）（4724）（4743）、三重（4711）（4741）

（Ⅳ）那須与一（流布本巻十一、正節本巻一下）

④ 白声 (1)候ふめれ（73 3）（時葉覚）―候ふらめ（流）、(2)大将軍（73 3）（葉覚）―大将軍の（流時）、(3)御覧ぜられん所を（73 4）（流時葉）―御覧ぜば（覚）、(4)とこそ（73 4）（流時）―と（覚葉）、(5)存じ候へ（73 4）（流時）―覚え候ふ（葉覚）、(6)さりながらも（73 4）（時）―さりながら（流）・さは候へども（葉）・さも候へ（覚）、(7)べうも（73 4）（流時）―べう（葉覚）、(8)申しければ（73 4）（流時葉）―申す（覚）、(9)判官（73 4）（流時葉）―ナシ（覚）、(10)ⓐ味方に射つべきⓑ仁は（73 4）（流時葉）→ⓐとⓑが逆（覚）、(11)と宣へば（74 1）（時覚）―と問ひ給へば（流）―ナシ（葉）、(12)上手（74 1）（時葉覚）―手だれ（流）、(13)多う（74 1）（流時葉）―いくらも（覚）、(14)宗隆とて（74 1）―宗隆こそ（流時葉覚）、(15)小兵にては（74 1）→では（流時覚）・で（葉）、(16)手はきいて候ふ（74 1）（流時）―手ききで候へ（葉覚）、(17)それに（75 2）（流時）―ナシ（葉覚）、(18)殿ばら（75 2）（時）―人々（流葉）・人（覚）、(19)ⓐこれよりⓑとうとう（75 2）（流時葉）→ⓐとⓑが逆（覚）、(20)鎌倉へ（75 2）（流時葉）―ナシ（覚）、(21)下らる（75 2）―帰らる（流時葉覚）、(22)とぞ（75 2）（流時覚）―とこそ（葉）、(23)宣ひける（75 2）（流時覚）―宣ひけれ（葉）、(24)さ候はば（75 3）（流時葉）―ナシ（覚）、(25)はづれんをば（75 3）（流時葉）→は（覚）、(26)存じ（75 3）（流）―知り（時葉覚）、(27)候はず（75 3）（流葉覚）―候ふまじ（時）、(28)御諚で候へば（75 3）（流時覚）―ナシ（葉）、(29)黒き馬（75 3）（流時覚）―黒馬（葉）、(30)逞しきに（75 3）（流時葉）―逞きに小ぶさの鞦かけ（覚）、(31)金覆輪の（75 4）（流時）―ナシ（葉覚）、(32)鞍を（75 4）（葉）―鞍（流時覚）、(33)置いて（75 4）（流時）―置いてぞ（葉覚）、(34)乗たりけるが（75 4）（流）→ナシ（時葉覚）、(35)くつて（75 4）（流時葉）―くり（覚）、(36)向いてぞ（75 4）（流時葉）―向いて（覚）

㋺ ハツミ (37)と申す（74 1）（流時）―ナシ（葉覚）、(38)歩ませける（75 4）（流時葉）→ければ（覚）

㋩ 口説 (39)つは者（72 4）（流時葉）―者（覚）、(40)二十騎（72 4）（流時覚）―二十騎ばかり（葉）、(41)打連れ〳〵（72 4）（流時覚）―ナシ（葉）、(42)馳来る程に（72 4）（流時葉）―参りければ（覚）、(43)三百余騎に（73

1）（流時）↓にぞ（葉覚）、(44)なり給ひぬ（73 1）（流時）―なりにける（葉覚）、(45)源平互に（73 1）（流時）―ナシ（葉覚）、(46)ここに（73 1）（時）―ナシ（流葉覚）、(47)沖の方（73 1）（時覚）―沖（流葉）、(48)小舟を（73 1）（葉）―小舟（流時覚）、(49)向いてぞ（73 1）―向いて（葉覚）・向って（流時）、(50)漕がせける（73 1）―こぎよせけり（葉覚）・こぎよせ（流時）、(51)渚（73 2）―渚より（流時葉）・磯へ（覚）、(52)七八段（73 2）―七八段ばかり（流時葉覚）、(53)にも（73 2）（流時）―に（葉覚）、(54)所（73 2）（流時葉）―程（覚）、(55)年の（73 2）（流時葉）―ナシ（覚）、(56)女房の（73 2）（流時葉）―女房の誠に優に美しきが（覚）、(57)着たりけるが（73 2）―きたるが（流時葉）・きて（覚）、(58)判官（74 1）（流時）―ナシ（葉覚）、(59)証拠はいかに（74 1）（時葉覚）―証拠があるか（流）、(60)と宣へば（74 1）（時葉覚）―ナシ（流）、(61)さん候（74 2）（流時）―ナシ（葉覚）、(62)射落し候（74 2）（流時葉）―射落す者で候（覚）、(63)判官（74 4）（流時）―ナシ（葉覚）、(64)与一（74 4）（流）―宗高（時葉覚）、(65)射て（74 4）（流時覚）―射（葉）、(66)敵（74 4）（流時葉）―平家（覚）、(67)と宣へば（75 1）（流）―ナシ（時葉覚）、(68)ナシ（75 1）（葉）―与一（流時）・与一畏って申しけるは（覚）、(69)仕つとも存じ候らはず（75 1）（流時）―仕らうとも存じ候はず（葉）・射おほせ候はむ事不定に候ふ（覚）、(70)あの扇（75 1）―これを（流時葉）・ナシ（覚）、(71)射損ずる程ならば（75 1）（時）―射損ずるものならば（流）・射損じ候ふ程ならば（葉）・射損じ候なば（覚）、(72)御弓矢のきず（75 1）（流時）―弓矢の御きず（葉）―御きず（覚）、(73)べうも（75 1）（流時）―べう（葉覚）、(74)与一が（75 4）（流時葉）―ナシ（覚）、(75)一定この若者（75 4）（時葉）―この若者一定（流覚）、(76)仕つっべう（76 1）（時）―仕らんと（葉）・仕らうずると（流）・仕り候ひぬと（覚）、(77)存じ（76 1）（時）―覚え（流葉覚）、(78)頼もしげ（76 1）（流覚）―よに頼もしげ（時葉）、(79)海のおもて（76 1）（時）―海の中（流葉）・海（覚）、(80)入れたりけれ（76 1）（流時葉）―入れたれ（覚）、(81)未だ扇のあはひ（76 1）―尚扇の交は（流時覚）・扇の交なほ（葉）

㋺ 強リ下ケ (82)陸（73 3）（流時覚）―渚（葉）、(83)向いて（73 3）（流時覚）―向って（葉）、(84)招きける（73 3）（流時葉）―招いたる（覚）、(85)と申しければ（74 2）（流時）―と申す（葉）・ナシ（覚）、(86)判官（74 2）（流時）―ナシ（葉覚）、(87)与一よべ（74 2）（流）―与一召せ（時）・よべ（葉）・めせ（覚）、(88)召されけり（74 2）（流時葉）―召されたり（覚）、(89)申しければ（75 1）（流時葉）―申す（覚）、(90)ばかりも（76 1）（流時）―ばかりは（葉覚）、(91)とぞ見えし（76 2）（時）―とこそ見えたりけれ（流葉覚）

㋩ 拾 (92)未だ（74 2）（流時葉）―ナシ（覚）、(93)匂（74 3）（葉）―威し（流時覚）、(94)二十四指いたる（74 3）（流時葉）―ナシ（覚）、(95)矢負ひ（74 3）（流時葉）―矢のその日の軍に射て少々残りたりけるを頭高に負ひなし（覚）、(96)わりあはせて（74 3）（流時葉）―ナシ（覚）、(97)はいだりける（74 3）（流時葉）―はぎまぜたる（覚）、(98)脱いで（74 4）（流時葉）―ぬぎ（覚）、(99)御前（74 4）（流時葉）―前（覚）

㋥ 上音 (100)射損ずる（76 4）（時）―これを射損ずる（流葉覚）、(101)程（76 4）（時葉）―もの（流覚）、(102)帰さん（77 1）（流）―迎へん（時葉覚）、(103)風（77 1）（時）―風も（流葉覚）、(104)弱って（77 1）（流時葉）―弱り（覚）、(105)こそ（77 2）（流時）―ぞ（葉覚）、(106)鏑は（77 2）（流時葉）―ナシ（覚）、(107)程に（77 2）（流時葉）―程（覚）、(108)海に（77 3）（時）―海へ（流葉覚）、(109)春風に（77 3）（流時葉）―しばしば虚空にひらめきけるが春風に（覚）

㋭ 下音 (110)別しては（76 4）（流時葉）―ナシ（覚）

㋬ 呂 (111)なし（76 3）（流時葉）―ぞなき（覚）、(112)なりにけれ（77 2）（時）―なったりける（流葉覚）

㋮ 強声 (113)今度（75 2）（流時）―ナシ（葉覚）、(114)赴かんずる者ども（75 2）（時）―向はんずる者ども（流葉）・赴かん殿ばら（覚）、(115)皆（75 2）（流時）―ナシ（葉覚）、(116)命をば（75 2）―命を（時葉覚）・下知を（流）

㋚ 下リ (117)陸（763）（流時覚）―渚（葉）、(118)揃へ（763）―並べ（流時葉覚）

㋛ 三重 (119)十八日（762）（流時葉）―十八日の（覚）、(120)事なれば（762）―事なるに（流時葉覚）、(121)烈しくて（762）（時葉覚）―烈しう吹きければ（流）、(122)据ゑて（762）（時）―据ゑ（流葉覚）、(123)定まらで（762）―定まらず（流時葉覚）

㋜ 走三重 (124)皆紅の扇の日出いたるが夕日に輝いて（773）（時）―皆紅の扇の日出したるが夕日の輝いたるに（葉）・皆紅の扇の夕日の輝くに（流）・夕日の輝いたるに皆紅の扇の日出したるが（覚）、(125)上に（774）（時）―上に漾ひ（流葉覚）、(126)ゆられけるを（774）（流時）―ゆられければ（葉覚）

▽異同無し　下音（772）

説明

右記における本文異同の底本は尾崎本平家正節であり、曲節名も同書による。

※例えば鱸の(1)「失せ給ひしかば（253）（流時葉）―失せにき（覚）」とあるのは、次の如き意味である。尾崎本平家正節（大学堂書店刊影印本）の25頁右下欄白声に「失せ給ひしかば」とあり、流布本・時房本・葉子本も同様だが、覚一本では「失せ給ひにき」となっている。

また鱸の例(9)「参られけるが（272）→に（流…）」とあるのは、次の如き意味である。尾崎本平家正節27頁左上欄白声「参られけるが」の部分が、流布本等で「参られけるに」となっている。つまり、→印は～部分のみの異同を示すわけである。

※大学堂書店影印本では、尾崎本の四頁分を一頁に収めている故、その右上欄・左上欄・右下欄・左下欄の順に、それぞれ1―2 3 4の如く示した。本稿で正節本の頁数を示す場合は、すべてこの要領によった。

※その他の諸本の略号は次の如くである。（覚）―覚一本―岩波古典文学大系本による。（葉）―葉子十行本―朝日古典全書による。（神）―神宮文庫本（内裏炎上の句に波多野流の譜記）。（静）―静嘉堂文庫蔵松井簡治氏旧蔵本。（藤）―書陵部蔵藤波本。（時）―下村時房刊本―古典全集本による。（流）―元和七年刊流布本。（波）―松岡仲良写波多野流譜本、東京大学蔵。（教）―一方流譜本、東京教育大学蔵。（也）―横井也有自筆譜本―角川書店刊影印本による。（豊）―豊川検校本、早稲田大演劇博物館蔵。

※右記諸本のうち覚一本・葉子本・時房刊本・流布本・平家正節の五者以外は、省略に従った場合が多い。

本稿の内容は、昭和五十三年十月国語学会（於熊本）における講演と一部重複する。また「平曲の国語学的研究」については、昭和四十九～五十二年度にわたり、文部省より科学研究費助成金（一般研究）をうけた。